

資料

大学におけるカウンセリング教育の課題

古賀香代子

Issue in Counseling Education at Universities

Kayoko KOGA

〔要約〕 公認心理師養成カリキュラムが開始され、カウンセリング教育を心理演習として、ロールプレイを実践している。初学者に対し、カウンセリングを行う際に必要な技術をより明確に示し、確実に獲得するための仕組みが必要と感じ、医学教育で行われる OSCE (Objective Structured Clinical Examination) の手法を取り入れた。医学教育で OSCE が実施されるようになった背景には、国が医師の専門性と備えるべき能力を明らかにし、臨床力の評価のための試験として位置付けた経緯がある。医学教育コア・カリキュラムモデルを概観し、公認心理師養成カリキュラムに不足する到達目標の明示やロールプレイの客観的評価とその活用などの課題が明らかになった。

キーワード：カウンセリング、公認心理師、OSCE、カリキュラム

I. 問題と目的

2015年心理職の国家資格公認心理師が制定され、2018年より大学における公認心理師カリキュラムが開始された。公認心理師に求められる職務を果たすための知識や技能等の獲得を目指し、心理職の育成を行う新たな専門教育の始まりである。最も注目されるべきは、大学教育で指定科目を履修することとなり、心理における新たな教育体系が導入されたことである。公認心理師カリキュラム開設に伴い、大学では既存の科目を再構成するとともに、これまで実施されてこなかった心理実習が行われることとなった。実習は座学で得た知識をもとにさらに実践的な知見を得るものであり、その前提にさまざまな専門的技能を獲得するための心理演習が必須となる。公認心理師カリキュラムの心理演習で中心となる内容は、心理査定とカウンセリングであり、これまでも心理系の科目として定番のものとなってきた。しかし、多くは公認心理師を目的とした実習に連結する内容ではないため、見直しが必要となり、さまざまな試みが行われている。

すでに、公認心理師養成カリキュラムに関して、いくつかの実践とその検証が論文にまとめられて

いるが、筆者も初学者へのカウンセリング技術獲得のための工夫について、心理演習Ⅱで実践しているロールプレイを積極的に取り入れた教育方法を紹介し、ロールプレイに充てる時間が短く、十分な練習ができないところに日本のカウンセリング教育の脆弱性があると指摘した(古賀, 2023)。学生は1コマ90分という限られた時間の中でカウンセリングのロールプレイを行い、模擬的にセラピストやクライアントの役をとり、体験を通して基本的な技術を学ぶ。しかし、このような体験型の学びをするには90分は短い時間である。新たに公認心理師を養成するという目的を持った教育実践のなかで試行錯誤しながら、より効果的な方法を模索している。カウンセリングを行う際に必要な技術をより明確に示し、確実に獲得するための仕組みが必要と感じている。さらに、公認心理師としての専門性にも注目し、職務を果たすために求められる技能が明確になることが重要と思われる。「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年に提唱した社会人基礎力が職務を果たす能力のベースになる。社会人基礎力は「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の

3つの能力から構成されており、他者との関係性を取り扱う心理の専門職には必須の能力と言えるだろう。これらも含めてコミュニケーション能力を身につけていくことが、カウンセリング教育に求められる。

2024年度は心理演習Ⅱに2022年より導入したOSCE (Objective Structured Clinical Examination 以下、OSCE) の実践にも力を入れた。ある場面を練習し、要点の解説や教員によるデモンストレーションを行った後にロールプレイトストを行いその評価を学生にフィードバックしている。今回は、OSCE を公認心理師カリキュラムに導入することについて整理し、効果的な教育に向けての課題を検討したい。

Ⅱ. 公認心理師養成カリキュラムへの OSCE 導入

1. 医師養成課程における OSCE

① 質保証と OSCE 導入の経緯

近年医師養成教育において、医療面接という形で学生にコミュニケーション技術の習得が目指されてきた。OSCE は、これによって獲得されたコミュニケーション能力を確認するロールプレイトストである。臨床実習前に医学生知識、態度及び技能の評価を行う試験として医学生共用試験が2005年から実施されてきた。2020年からは臨床実習の総括的評価として臨床実習後 OSCE が実施され2023年度から医師法に基づいた公的試験として実施されている (藤田ら, 2024)。OSCE は他の医療系関連職種にも導入され、医師だけでなく、歯科医師、薬剤師の共用試験でも実施されており、看護師、作業療法士、理学療法士も同等の試験が準備されつつある。作業療法士、理学療法士は技術の確実な習得のため、臨床実習前後に OSCE を行い、到達度を確認する (才藤ら, 2019)。このように医療領域での OSCE の活用は急速に広がっている。

医師養成課程における OSCE は、専門 (職) 教育の質保証という観点から始まったものである。その経緯について、橋本 (2011) はわが国の専門職養成の在り方の転換期として、質保証システムに着目し、その中で OSCE 導入の経緯と目的、果たす役割を論じている。質保証については、

2000年代に入り国の政策と高等教育全般にわたり目指されるようになった。すなわち中央教育審議会 (以下、中教審) の審議・答申を経て整備されてきたという流れがある。2004年より認証評価制度が始まり、全ての大学・短期大学・高等専門学校で定期的に国が認証した評価機関による評価を受けることとなった。

専門職が多種ある中、医師についてはその専門性が明確である。橋本 (2011) は、「医療行為という医師の役割が社会から一定の『合意』がとりやすくコアカリ (コアカリキュラム; 筆者補足) なども策定しやすい」とした上で1995年11月文部省が設置した「21世紀医学・医療懇談会」において「21世紀における我が国の医学・医療の姿を見据えた教育・研究・診療の進展を図る上で必要な諸方策について」検討が開始され、第4次報告以降、医学教育全般にわたって大きな改革が行われたことを概観している。

② 医学教育のコアカリキュラムにおけるコミュニケーション能力と OSCE

最新の医学教育モデル・コア・カリキュラム (令和4年版、文部科学省) の大項目にコミュニケーション能力について次のように記されている。「患者及び患者に関わる人たちと、相手の状況を考慮した上で良好な関係性を築き、患者の意思決定を支援して、安全で質の高い医療を実践する。」更に、学修目標が具体的に細かく挙げられており (表1)、言葉遣い、服装、身だしなみから始まり、さまざまな医療場面で医療を適切に提供するために必要なコミュニケーション能力が求められている。

続く多職種連携能力は「医療・保健・福祉・介護など患者・家族に関わる全ての人々の役割を理解し、お互いに良好な関係を築きながら、患者・家族・地域の課題を共有し、関わる人々と協働することができる。」とされ、他の専門職種と一緒にチーム医療を行うため、コミュニケーション能力だけでなく対人場面で必要な人への理解と社会人としての能力が求められている (表2)。この説明にある「患者」を「心理支援を要する人」に置き換えると、殆どが公認心理師に当てはまる内容である。すなわち、この学修目標は公認心理師にとっても専門的な職務を果たす際に必要な能力

といえる。チームアプローチを行うため、協働し専門性を発揮し、より良い医療や福祉などそれぞれの職種に求められる役割を発揮するためのコミュニケーション能力ということができる。さらに、ここでは細かく具体的に明記されていることに着目したい。

このように医学教育のモデル・コア・カリキュラムで具体化された能力を評価するために導入された方法の一つが OSCE である。共用試験では模擬患者に対する臨床試験が行われ、同一課題の試験で評価の標準化、均質化が行われているという特徴がある。

表1 医学教育モデル・コア・カリキュラムの学修目標：コミュニケーション
(文部科学省：医学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年版）より筆者抜粋)

CM Communication	コミュニケーション能力 患者及び患者に関わる人たちと、相手の状況を考慮した上で良好な関係性を築き、患者の意思決定を支援して、安全で質の高い医療を実践する。
CM-01	患者に接する言葉遣い・態度・身だしなみ・配慮 患者のプライバシー、苦痛等に配慮し、非言語コミュニケーションを含めた適切なコミュニケーションスキルにより良好な人間関係を築くことができる。
CM-01-01	患者・家族への適切なコミュニケーションスキルの活用
CM-01-01-01	言語的コミュニケーション技能を発揮して、良好な人間関係を築くことができる。
CM-01-01-02	非言語的コミュニケーション（身だしなみ、視線、表情、ジェスチャー等）を意識できる。
CM-01-01-03	患者や家族に敬意を持った言葉遣いや態度で接することができる。
CM-01-01-04	対人関係に関わる心理的要因（陽性感情・陰性感情等）を認識しながらコミュニケーションをとることができる。
CM-01-01-05	相手の話を聞き、事実や自分の意見を相手にわかるように述べることができる。
CM-01-02	患者の立場の尊重と苦痛への配慮
CM-01-02-01	患者や家族の精神的・身体的・社会的苦痛に十分配慮できる。
CM-01-02-02	患者や家族の話を傾聴し、怒りや悲しみ、不安等の感情を理解し、共感できる。
CM-02	患者の意思決定の支援とそのための情報収集・わかりやすい説明 患者や家族の多様性に配慮し、必要な情報についてわかりやすく説明を行い、患者の主体的な治療やマネジメントに関する最善の意思決定を支援できる。
CM-02-01	患者へのわかりやすい言葉の説明
CM-02-01-01	患者や家族の多様性（高齢者、小児、障害者、LGBTQ、国籍、人種、文化・言語・慣習の違い等）に配慮してコミュニケーションをとることができる。
CM-02-01-02	患者が理解できるよう、極力専門用語を使わずに、わかりやすく説明できる。
CM-02-02	患者への行動変容の促し
CM-02-02-01	患者や家族と情報共有や意見のすり合わせを行い、理解と同意を踏まえた意思決定を支援できる。
CM-02-03	患者の意思決定の支援
CM-02-03-01	患者の自己決定を阻害する問題点を理解する。
CM-02-03-02	患者の経験を尊重し、価値観を明確にできるように傾聴することができる。

CM-02-03-03	患者の意思決定支援のために、最善のエビデンスをできるだけ専門用語を使わずに、わかりやすく説明することができる。
CM-02-03-04	患者の価値観に沿った目標に基づいた治療方針を計画することができる。
CM-03	患者や家族のニーズの把握と配慮 患者や家族の心理的、社会的背景を広い視野で捉える姿勢を持ち、患者の持つ困難や必要な情報提供に対応できる。
CM-03-01	患者・家族の課題の把握と必要な情報の取得
CM-03-01-01	患者の心理的及び社会的背景や自立した生活を送るためのニーズを把握することができる。
CM-03-01-02	患者が抱える課題、問題点を抽出・整理できる。
CM-03-01-03	患者自身から情報が得られない場合、代理人や保護者等から必要な情報を得ることができる。
CM-03-02	患者・家族の心理・社会的背景に配慮した診療
CM-03-02-01	家族や地域といった視点を持ちながら、コミュニケーションをとることができる。
CM-03-02-02	心理・社会的背景に配慮した診療に可能な範囲で参加することができる。
CM-03-02-03	医療の不確実性を理解した上で適切な行動や態度をとることができる。

表2 医学教育モデル・コア・カリキュラムの学修目標：多職種連携能力
(文部科学省：医学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年版）より古賀抜粋)

IP Interprofessional Collaboration	医療・保健・福祉・介護など患者・家族に関わる全ての人々の役割を理解し、お互いに良好な関係を築きながら、患者・家族・地域の課題を共有し、関わる人々と協働することができる。
IP-01	連携の基盤 患者や利用者、家族、地域の重要な課題について、協働する関係者と共通の目標を設定する過程で、背景が異なることに互いに配慮し、役割、知識、意見、価値を伝え合うことができる。
IP-01-01	患者中心の保健医療福祉
IP-01-01-01	患者・利用者・家族に関連する情報について、多職種及び他の医療系学部との学生と共有できる。
IP-01-02	多職種間コミュニケーション
IP-01-02-01	多職種及び他の医療系学部との学生の役割や意見を尊重した説明や返答、問いかけができる。
IP-01-03	医師間の紹介と相談
IP-01-03-01	適切な診断・検査・治療のために、適切な施設・専門科・医師への紹介や相談ができる。
IP-01-03-02	患者のケアと責任が継続できるよう、医師間での考えや期待を共有できる。
IP-02	協働実践 自他の役割や思考・行為・感情・価値観を踏まえ、協働する職種で信頼関係を構築し、時に生じる職種間の葛藤にも適切に対応しながら、互いの知識・技術を活かし合い、職種としての役割を全うできる。

2. 心理師養成課程への OSCE 導入

①公認心理師養成カリキュラム

公認心理師が国家資格化して間もないこともあり、養成カリキュラムは開発途上であり、医学教育のカリキュラム整備と比べると大きく見劣りする。公認心理師カリキュラムについては、2015年国家資格成立により公認心理師法が成立し、この法律に基づく心理の専門職を養成するため、2016年9月公認心理師カリキュラム等検討会が厚生労働省において開催されたところから本格的な議論が行われてきた。この検討会は2回開催された後、「公認心理師カリキュラム等ワーキングチーム」として公認心理師法（平成27年法律第68号）に規定する公認心理師となるために必要な科目、国家試験の科目などの検討を行っている。2017年5月31日にこれまでの検討した内容をとりまとめられた「公認心理師のカリキュラム等検討会報告書」が公認心理師養成を開設する大学及び大学院の指針となった。これまで行われていたカウンセラー教育が、「公認心理師」という国家資格の下、同じ到達目標を共有することとなったのである。

この報告書は、これまでの大学の既存の関連科目を整理し、公認心理師に必要な知識や技能を獲得するために必要な科目が網羅されている。しかし、表1、表2に示した医学教育モデル・コア・カリキュラムのように細分化され具体的に説明されたものは見当たらない。カリキュラムの到達目標には、公認心理師としての職責の自覚の項に「心理に関する支援を要する者等の安全を最優先し、常にその者中心の立場に立つことができる。」と一文がある。また、心理に関する支援（相談、助言、指導その他の援助）に「良好な人間関係を築くためのコミュニケーション能力を身につける。」と書かれている。更に演習について面接及び心理検査等のロールプレイ並びに事例検討を行うとされているが、「実施できる」、「説明できる」などとどまり、相手への態度や言葉遣いなど、具体的にどのような能力を獲得していなければならないのかは不明である。

実習・演習以外のカリキュラム必修科目は国家試験の対象となるため、試験問題の設計図であるブループリントに科目ごとの大・中・小項目が網羅されている。これによって何を学ぶべきかが把

握できる。一方、ロールプレイの学修目標については漠然としたあいまいな形である。国家試験でロールプレイのような実技の試験が実施されないこともあり、この時点での未整備は仕方のないことであろう。しかし、公認心理師が臨床場面で専門的な一定水準の技能を持つことは必須のことであり、そのための指標を立てるべきであると考ええる。

②臨床心理学のカウンセリング教育におけるロールプレイ

カウンセリングは心理面接や教育相談、あるいは福祉領域の専門職など対人援助職に必要な知識として学ばれてきた。臨床心理の分野では、ロールプレイによる面接の学習など散見するが、これを同じように行うという統一したモデルが確固として示されてはいない。さまざまな流派があり、それぞれで面接法として説明されており、その中に傾聴や共感などの共通項を見出すことができる。田所（2018）は初学者へのカウンセラー教育を展望し、カウンセリングの基礎訓練モデルとして、「マイクロカウンセリング」、「ヘルピングスキル」、「熟練した援助スキルモデル」をあげている。カウンセラー教育方法については、「ロールプレイ」、「グループ体験」、「個人カウンセリング」、「臨床実習とスーパービジョン」について内容を紹介し、それぞれの効果について述べ、教授法にも言及している。これらは、最も多くの大学教育で用いられている方法であり、教育実践で得られるものを明確にとらえ組み合わせることでの効果的な教育が実践できるのではないかと考える。

ロールプレイについては、さまざまな研究報告がある中、カウンセリング技法の習得という文脈で行われた実践を取り上げる。赤嶺（2010）はマイクロカウンセリングの「基本的かわり技法」について、臨床心理学を学ぶ大学院生のロールプレイで発話量を測定し、その語りの内容などを分析している。この研究で興味を惹かれるのは、技法を覚えても運用の仕方によって効果が異なることに着目した点である。セラピストはクライアントの文脈に沿うこと、クライアントの使用した「言葉」を大切にすること、「聞き役」であることの3点をあげ、初学者が技法を学ぶ際に陥りやすい

問題を論じている。赤嶺（2010）は「何か専門的なことをしなければならない」と思い、そちらに気を取られ技法の使用を意識しすぎると、クライアントの語りの文脈から離れ、心の動きを把握できずぎこちな面接になったと説明している。これは、本学のカウンセリングのロールプレイ後、学生に提出させる振り返りのレポートにも同じような内容が多数書かれている。希望のコースでいよいよ本格的に実践訓練を受けるという緊張に加え、専門的なものに触れる期待も大きいので、どうしても気負ってしまうのだろう。初学者が陥りやすい心情でもあり、それもあることとして基本を繰り返し体験させている。また、ぎこちなさから脱出する方法も教育の中に盛り込むようにしている。

山田（2007）は、傾聴と共感的理解の学習を目的としてロールプレイを行い、カウンセラー役とクライアント役の経験を通して、理論や技法を知識として知っているということと、実際に自分が動くことができるということが大きく異なることに気づいていくことを指摘している。これらの実践は、概ね多くの臨床心理学の教育の中で扱われてきた内容である。これまでの臨床心理学におけるロールプレイでは、経験することに重点が置かれ、学生のそれぞれのペースに合わせ、経験からの学びを待つことが殆どであったため、能力を客観的に評価するということは行っていなかったと言えるだろう。

③臨床心理学における OSCE

現在、公認心理師養成カリキュラム開始から7年目となり、新しいシステムからの公認心理師1期生が誕生したことを機にカリキュラムの検証と見直しが行われている。特に学部教育における心理実習と心理演習は新たに導入された科目であり、2023年度より実習指導者講習会が開始され全国の公認心理師養成のための教育が統一した形に整えられているところである。国家資格となった当初から、他の先行する国家資格のシステムが公認心理師の制度に反映されている。医学教育の実践は公認心理師のカリキュラムに今後さまざまな形で反映されることが予想される。特に、コミュニケーションスキルの評価を行う OSCE は、医師以外の医療系専門職の養成課程で既に取り入れ

られており、公認心理師の養成においても必要な臨床能力を着実に身につけるための方法として今後広まがる可能性が高いと考える。服部・榎木・田形（2021）は臨床心理学分野における OSCE の導入を文献によって調べ、臨床心理分野で OSCE が実施されていることを明らかにした。しかし、この研究は海外の文献が多く、日本での実践研究報告は含まれていない。

④心理演習での実際

本学では公認心理師養成カリキュラムの必修科目である心理演習のなかで、カウンセリング関連の教育を行っている。テキストを使用し理論を説明し、演習では基本的なカウンセリング技術をロールプレイで学ぶことから始めている。話を聴くための演習を多く取り入れるが、短い時間であっても、自分の話をするということの難しさがあることが、それまでの学生のフィードバックから見えてきた。ランダムに相手を選び、傾聴や共感するために話を聴く、話をするのは確かに負担も大きいように思われる。自分の話をしていると、思いがけず深い話になってしまったり、それを聞いてあまりにも共感し過ぎでしまったりするなど侵襲性が高い場面が起こる可能性がある。そこで考えたのが「おとぎ話のワーク」である（古賀，2023）。桃太郎やシンデレラなど、誰もが知っている話の主人公になって、辛い話をしてもらうというロールプレイを行う。始めた当初は、好きな物語の主人公になって、好きに話をしてくださいとのみ指示を出した。しかし、やってみると、物語を知らない、よく話せなかったという者もあり、あらかじめ題材を絞り込んで行うほうがよりロールプレイとしてはやりやすいのではないかと、検討中である。このロールプレイは「体験すること」を目的としていると説明し実施しているため、ロールプレイの技能を評価するわけではない。むしろ、自分や他者に起きてくることに気づくことが主目的となる。

⑤心理演習への OSCE の導入

公認心理師について、初学者へのコミュニケーションスキルを教える学部教育では、医学教育で行われる OSCE の到達目標をと同じような内容を教えることがわかりやすいだろう。初対面のクライアントに話を聞く、普段の会話をスムーズに

行うなど、日常に近い場面で適切にふるまうことができるのかなど、基本的なコミュニケーション技術である。デモンストレーションで見本を見せ、ポイントを解説し、練習を行っていく。前後にロールプレイテストを実施し客観的に評価する。結果のフィードバックを行い、改善に向けた練習をさらに行っていく。

医学教育での OSCE はロールプレイの相手役である患者には第三者をあてる。患者役を演じてくれる人を用意し、時にはその養成を行って、リアリティーを出すのである。しかし、心理演習の授業でそのような手配は難しい。2人の教員が担当しているので、1人の教員が相手役を行っている。1つの場面に20名を超える学生の相手を一人で行うため、負担は大きい。しかし、その後に行われる心理実習でこの演習がとても役にたったという多くの学生の声をきくことが多く、励みになっている。

Ⅲ. 考察

① カウンセリング教育におけるロールプレイの役割

カウンセリングができるようになるためには、理論を理解しているだけでは不十分である。例えるならば、自転車の形や役割、動く仕組みや乗り方を本で学んだだけの状態と同じである。知識はあっても、自転車に触れたこともなく乗ったこともないので、乗った感覚はわからない。ロールプレイは実際に自転車に触れ、補助輪をつけた自転車に初めて乗る感覚と同じかもしれない。ぎこちなく、こわごわと慎重にペダルを漕ぐ。少しだけ自転車に乗るということを実感する。この繰り返しで、自転車に乗ることができるようになる。学部における初学者のカウンセリング教育においても、コミュニケーションスキルをロールプレイで何度も練習し実際にやってみるという経験は必須である。大学院でケースを担当するようになって、ようやく補助輪をはずした自転車で自走ができるようになる。まだそばには教えてくれる教員や先輩・友人などがいる安全な道である。ここでひとりの体験をして実践力を身につけていくことになる。実際の臨床場面はマウンテンバイクで道なき険しい山道に行くようなものである。前に進むために道を選び、ハンドル操作を一人で行い、

自分の足でペダルを踏み続けなければならない。時には後戻りや、立ち止まったまま途方にくれることもある、何が起こるのかわからない旅をしているようなものである。このような厳しさに耐えるためにも順を追って段階的にカウンセリングができるようになる教育システムが必要になってくる。

これまでの大学教育において、カウンセリング教育は担当する教員の背景に拠ってさまざまな方法で行われてきた。ロールプレイも用いるが、体験することを第一に、到達目標に向けて訓練するという意識は希薄だったと思われる。公認心理師の養成では、ロールプレイによって獲得する技術や到達目標が明らかにした上で、効率的に学ぶ仕組みが必要となった。従来のカウンセリング教育からの大きな転換が起きていると言えるのではなかろうか。ただ、これまで行われてきたカウンセリング教育は、それぞれの理論を背景に持った伝統のあるものであり、有用なものである。例えば生涯教育の中に組み込んでさらに専門的スキルとして位置づけ活用することができるだろう。

② OSCE がカウンセリング教育にもたらすもの

OSCE は公認心理師として、専門性の資質として身につけるべきコミュニケーション能力を獲得するために有効な方法と考える。OSCE の客観的評価を行うという仕組みは、評価される職種の専門性が客観的かつ具体的に説明され、広く知られていることを前提としている。それ故、公認心理師カリキュラムに OSCE を取り入れるということは、何を到達目標にするのかという指標が明らかにされることになり、改めて公認心理師が行う心理的支援に必要な要素も含め精査されていくことが望まれる。カウンセリングや心理療法を行う上で求められる技術・態度もこの中に含まれる。

OSCE のロールプレイテストで行う評価には2つの側面がある。1つ目は基準の能力を獲得しているかどうかであり、合否の判定を行う。初学者のカウンセラー教育にはゲートキーパー的な要素も含まれると田所 (2018) は述べている。すなわち、教育のなかでその専門職には不適格な者を振り落とす機能も必要である。到達目標が明確に説明され、標準化された合格の基準があれば、この作業は比較的安全に行われるだろう。合格点に満

たない場合、その根拠が明らかであれば、不足する部分を自覚し、結果に納得もできる。2つ目は客観的に明らかになった不足する能力を伸ばすため、的を絞った訓練を行うことができることである。コミュニケーションスキルのできていない部分を徹底して練習することで適応的な技術を獲得できることは、SST (Social Skills Training) などでも明らかである。

③公認心理師カリキュラムへの OSCE 導入の課題

OSCE はカウンセリングの技術獲得という点でも有効である一方で、公認心理師カリキュラムに取り入れる際には課題がある。練習場面の内容は公認心理師が臨床場面で体験するものに置き換えることや、何をどのように学んでいくかのマッピングも行っていく必要があると感じている。

また、医学教育では模擬患者役の養成や構造化されたプログラムが整備されている。公認心理師養成で同等に行うことは難しく、ロールプレイや評価などを公認心理師に合った内容に置き換えながら徐々に整備していく必要がある。評価の際、ロールプレイの相手役は教員が行うことになり、20名以上の学生の相手を同場面で行わなければならないため、労力的な負担が大きい。複数名のスタッフで実施する必要がある、現在可能なものについて公認心理師用にアレンジしている。

OSCE をカウンセリング教育に取り入れることによって、公認心理師が専門家として持つべき能力は何かという教育において重要な問いが中核にあることが明らかになった。求められる能力、さらには資質を明らかにして教育を行わなければならない。その答えは早急に必要であるし、同時に慎重な検証を行いながら進めるべきものとする。

<参考文献>

赤嶺遼太郎 (2010), マイクロカウンセリングを用いたロールプレイング学習におけるセラピ

- スト役ークライアント役間の相互作用過程の分析：初学者におけるぎこちない面接となる理由を中心として、地域文化論叢 12 37-53
 藤田博一・野田泰子・荒関かやの・石原慎・岡田隆夫・清水郁夫・清水貴子・原田芳巳・山内かづ代・瀬戸山 (2024), 陽障害のある医学生の実験における合理的配慮の方針, 医学教育2024, 55 (2): p 69~175
 橋本紘市 (2011), 専門職養成の「質」保証システム：医師と法曹の教育課程を中心に, 東京大学大学院教育学研究科紀要 50 45-65, 2011-03-10
 古賀香代子 (2023), 初学者へのカウンセリング技術獲得のための工夫, 紀要 VISIO 巻 54号, 39-48, 2023
 厚生労働省, 公認心理師カリキュラム等検討会報告書 (平成29年 5 月31日版)
 METI/ 経済産業省 (2024), 社会人基礎力 <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>, 2024年12月20日閲覧
 文部科学省, 医学教育モデル・コア・カリキュラム (令和4年度改訂版), 医学教育モデル・コア・カリキュラム関連：文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20240220_mxt_igaku-000028108_01.pdf 2024年12月19日閲覧
 才藤栄一監修, 金田嘉清, 富田昌夫, 大塚圭, 杉山智久, 前田晃子, 鈴木めぐみ, 鈴木由佳理, 土山和大, 山田将之編集 (2019), PT・OTのための臨床技能と OSCE コミュニケーションと介助・検査測定編第2版補訂版
 田所撰寿 (2018), 初学者へのカウンセラー教育に関する研究の展望—日本における実証的研究に向けて, カウンセリング研究 Vol. 51 No. 1 2018 51-62
 山田俊介 (2007), カウンセリングの基礎学習としてのロールプレイに関する一考察, 香川大学教育学実践総合研究14, 71-79 p.

(2024.1.24受稿 2025.2.11受理)

Issue in Counseling Education at Universities

Kayoko KOGA

The curriculum for training licensed psychologists has been launched, and counseling education is practiced through role-plays as psychological exercises. We felt that a system was needed to more clearly demonstrate the skills necessary for counseling to beginning students and to ensure that they acquire these skills, so we adopted the Objective Structured Clinical Examination (OSCE) method used in medical education. The background to the implementation of OSCE in medical education is that the government clarified the expertise and abilities that physicians should possess, and positioned it as an examination for the evaluation of clinical skills. The core curriculum model for medical education was reviewed, and issues such as clarification of achievement objectives and objective evaluation of role-playing and its utilization, which are lacking in the training curriculum for certified psychologists, were clarified.

Key words: Counseling, Certified Public Psychologist, OSCE, Curriculum